

まえがき

室長 平野憲雄

はじめに、技術室報告7号を発刊できたことを投稿者はもちろんのこと編集に当たった皆様に深く感謝申し上げます。今年度は河内伸治氏と内山清氏の二人が定年退職されます。河内伸治氏は昭和39年5月に潮岬風力実験所に採用され、42年間にわたって風の観測をされてきました。内山清氏は昭和44年8月に大湊波浪観測所に採用され、35年以上にわたり波浪の観測や砂の粒度分析の仕事を続けられてきました。

一つの事に長年従事することは、本人の根気と体力があったからと言えはそれまでですが、根気の本元となるものは何かと考えますと、得られたデータの継続性の大切さを思う心ではないでしょうか。現在ただ今の観測値や測定値が異常なのか平年並みなのかの判断をするには、その根拠となるデータの継続性があるこそ可能です。「気がついたら定年になるまで続けたなあ」が実感かもしれません。簡単に語られる感想ですが、暴風雨の中で長年の経験と工夫が重ねられて、危険な作業も万全の注意を払いつつ当たり前の業務としてきた努力があると思います。お二人の長年の勤務に敬意をはらいつつ、月並みの言葉ですが本当に長い間ご苦労様でした。

法人になって安全が厳しく管理されるようになりました。本来は法人でなくても安全管理をしっかりせねばならないのですが、法的な外圧がないと安全対策はおろそかになりがちです。広義における防災研の役割は身の回りの安全をも視野に入っていると思われませんが、公的には狭義においての自然災害を対象としていますから、人的災害は研究対象外であると油断している面もあろうかと思えます。研究対象や業務内容に関わらず職場は安全を強く意識しなければなりません。

安全を軽視してきた歴史を反省し、防災研の技術者の安全について思うところを述べてみます。我々の業務には危険な作業（観測・測量・実験・調査・工作・自動車運転など）が付きものです。危険な場所は火山、急斜面、海岸、河川など普段は安全だが、地震活動や火山活動や気象変化が発生すると、高質のデータを得られますから我々の活躍する時ですが危険なため一般人は立ち入り禁止の場所となります。また工作においては旋盤やボール盤など刃物を使う業務、山道や雪道などの危険な所への自動車運転があります。このような仕事柄でしょうか熟練技術の中には危険回避のノウハウが長年の経験により身に付いており、当人にとっては常識になっています。若手技術者に技術継承をする場合は、この常識の部分は強いて教えません。危険な場所であっても測定や観測の専門技術の指導に終わり、若者に危険な行為をさせてしまうこととなります。現に、崖から転落して大けがをした技術員がいました。この危険回避のための安全教育は、幼いころの木登りや川遊びや山登りを遊びとして過ごしてきた人と、そうでない人では教え方や対策に違いが生じます。専門知識の伝授は当然としても無意識に安全な動きをする年配者は、意識して自分の体を守る術も伝授していかねばなりません。体験を伴った知識を伝えることで若い技術者に少しは安全な術を継承できると思います。「継続は力なり」の意味を重みのあるものとして捕らえなければなりません。技術の継承に安全を取り込み、防災研の技術支援集団を安全でしっかりした支援組織にしたいものです。今回の発刊内容から安全はどのように配慮されているかを意識して読まれ、いたらないところがあればご指摘いただけることを望みます。